

# しっかり伝える, しっかり伝わる。

第1385回放送用語委員会が、11月14日に大阪放送局で開かれた。委員は作家の清水義範氏と日本大学教授の荻野綱男氏で、参加局は大阪・京都・神戸・和歌山・大津の5局である。当日の議論を整理して報告する。

## ◎ことばの本来の意味を意識しよう

実は、この放送を日本政府も把握していましたが、共産主義のプロパガンダではないかと懸念し、国民には広く伝えていませんでした。

「懸念」は「不安・心配に思うこと」なので、ここでは〈…ないかと疑い、〉などとするのがよい。

手紙を書き続けた〇〇さん、亡くなる前の昭和63年に、記念館に手紙を寄付しました。

「寄付」は、お金や高価なものを提供するときに使ふことばである。〈寄贈〉〈提供〉などと言いかえることもできるだろう。

こちら、神戸港で就航している大型遊覧船です。

「就航」は、「〔できあがった汽船・航空機などが〕はじめて、航路につくこと」(『三省堂国語辞典(第七版)』、以下『三国』)で、ふつうはその便ができたときに使うことばである。ここでは〈運航〉とするのがよい。

地震の瞬間、港に停泊中だったこの船に、航海士として乗り込んでいました。

「瞬間」は、「〔まばたきをする間ぐらいの〕きわめて短い時間」(『三国』)である。ここで「瞬間」を使うと、「そのとき、まさにタラップから船に乗り込む最中であつた」という進行形の意味になってしまう。〈地震が起こったとき、〉とすれば、「すでに乗り込んでいた」という意図がきちんと伝わる。

…少しでも早く治療ができるようにする、全国でも異例の訓練に取り組んでいます。

「異例」は、どちらかというとよくないことに使われることが多い。〈(あまり)例のない訓練〉ではどうだろうか。

ドクターヘリで自動車事故の現場に向かった時、着陸する場所が見つからず、患者を助けられなかった経験が、きっかけでした。

「経験」は、ある程度時間をかけて身につけた知識や技能を指すことが多い。ここでは一回限りのことについてなので、〈体験〉のほうがよりふさわしい。

夏から秋にかけて、山の中の事故や急病患者が集中します。

「集中」は、空間的な移動を伴う場合に用いるのが本義で、時間的なことに適用するのは二次的な用法である。ここでは〈(特に)よく起こります〉〈多発します〉としてもよいだろう。

〇〇さんは、家族や会社にも盛大に見送られて出征しました。ところが体格不良で、すぐに送り返され、そのまま終戦を迎えたのです。…(中略)…終戦後も、償いの気持ちを抱えながら生きた、〇〇さんの思いがありました。

「償う」は、「相手に損害をあたえたり、自分が悪いことをしたりしたときに、おかね・品物・労働などの方法で、うめあわせをする」(『三国』)ことである。「体格不良で送り返されたこと」が「損害を与えた」「悪いことをした」に当たるかどうかは、議論が分かれるであろう。

## ◎耳で聞いてわかりにくい漢語

およそ3年半かけた屋根や壁の修理が終わり、創建当時の白い姿を現しました。

医師が上空から、ワイヤーで地上に降下することで、…

ダムの損壊の程度を調査していた〇〇さん。

二字漢語は、文脈があれば誤解されなれないと思いがちであるが、一方で同音異義語が少なくないことも考えておく必要がある。『NHK日本語発音アクセント辞典』に限っても、「そうけん 壮健, 創見, 創建, 双肩, 送検, …」「こうか 硬化, 降下, 高架, 効果, 校歌, 高価, 硬貨, 公課, 考課, …」などが掲載されている。

## ◎文の構造を単純に

申請のために資料の整理を進める中、当時、日本の国内で、抑留者の安否を独自に調べ、残された家族に手紙で伝えていた男性の存在が明らかになりました。

「進める」はその行為が主体的・意図的であるととらえているのに対して、そのあとの「明らかになりました」は、あることが自然に判明したという形になっている。一文の中で主語がねじれてしまっており、〈…整理が進められる中、〉とすれば問題ない。

〇〇さんの手紙を受け取った家族からは、200通に及ぶ、お礼の返事が届いていました。

たとえば〈〇〇さんからの手紙を受け取った家族はお礼の返事を送り、その数は200通に及んでいました。〉としたほうがわかりやすいであろう。

## ◎紋切り型になっていないか

集まった皆さんは、夕日に向かって、それぞれの思いで手を合わせていました。

復興のシンボルとして、人々の希望を運んだ遊覧船。

一般に、どこかで聞いたことのあるような言い回しは、あまり心に響かないこともある。もうひとつ工夫すると、さらによくなるはずである。

## 「放送用語に関する質問」から

参加者から事前に寄せられていた質問のなかから、ここでは2つ紹介する。

### Q 「こだわり」

マイナスイメージのことばのはずなのに、「追求」とか「一徹」の意で使われているのが気になります。

A このような意味でむやみに使うのは、あまり感心しません。本来の用法をふまえたうえで、使うのであれば効果的に使うべきだと考えます。

こだわ・る [◁▽拘る▷] コダハル (自五) ①  
そればかりを (いつまでも) 気にする。「おかねに—」② [自分なりに] こまかいことがらについて主張をおし通す。自分の好みを追求する。「ビールは銘柄 (メイガラ) に—」 [名] 拘り。  
(『三国』)

つまり、「自分で自分のことを言う」のであればさほど問題ないのですが、「ご主人のこだわりは何ですか」などの相手に尋ねるような使い方には、慎重である必要があります。

### Q 「犠牲者」

犠牲者は死者だけでなくけが人も含むはずで、犠牲者=死者という使い方には疑問を感じます。

A 「犠牲者」は、一般に「亡くなった人」のことを指すものと解釈されています。

犠牲者 「水 (山・海) の犠牲者」という表現は、死者の合計数を示すような場合には、「死者」という即物的な言い方を避けるための表現として、「水による事故で死亡した人、水に関係した事故で死亡した人」という意味で使って差し支えない。

「犠牲」の本来の意味からはずれるため、事故の原因が無謀な行いや計画にあるような場合には、抵抗感をもつ人もいるので、注意する。また、個々の事例については、「～して死亡しました」のように、具体的に言うほうがよい場合もある。  
(『NHK ことばのハンドブック (第2版)』p.58)

塩田雄大 (しおだ たけひろ)

## 第1385回放送用語委員会 (大阪)

【開催日】平成26年11月14日 (金)

【出席者】清水義範氏 荻野綱男氏

坂本忠宣 大阪放送局長

阪中 信之 放送文化研究所長 ほか